

東籬下、悠然見南山、と訓せられしと、禪林の詩僧はほめらるれども、菊の一字をあきしべばなと和訓つけしは、もつてまはりたる、こむづかしき訓ならずや、梅をむめと訓じ、櫻をさくらと譯せしには、はるかにおとりたる事ならずや、

〔松の落葉三〕菊

からくにの菊は、こゝのふぢばかまなり、そのよしあきらめいひてん、略 秋の野におのづからあまた生出てさく菊のはなは、ならのみやこのころにもあるべく、そは万葉集八の卷の歌にななくさとかぞへしなかのふぢばかまなりけり、そのな、くさは、山上憶良詠秋野花歌に、秋野爾咲有花乎、指折、可伎數者七種花、其一、芽之花、乎花、葛花、瞿麥之花、姫部志、又藤袴、朝貌之花、其二、とよめるにぞありける、かきかぞふればといへば、大かた秋の野に咲たる花の、あるかぎりをいへるこゝろなるに、あまた咲てうつくしききくの花をもらすべしやは、朝貌は桔梗、藤袴は菊なれば、げに秋の野のはなのこりなし、ものしり人は、ふぢばかまを蘭なりともいへど、らには生いづる野まれにして、七くさのかずにいるべき花のさまならず、類聚國史卷三十一、帝王部にも、平城天皇大同二年九月のくだりに、乙巳、幸神泉苑、琴歌間奏、四位已上共插菊花、于時皇太弟頌歌云、美那比度乃、曾能可邇米豆留布智波賀麻、岐美能於保母能多乎利太流祢布、上和之曰、遠流比度能己己呂乃麻丹眞布智波賀麻、宇倍伊呂布賀久爾保比多理介利、と見えたり、插菊花とありて、御歌にふぢばかまとよみたまへば、菊はこゝのふぢばかまなることさだかなり、さきに延暦の帝はきくとよみたまひしかども、花はすぐれてめでたけれど、こゝのふぢばかまと同じものなれば、かくもよみたまへるなり、さて插菊花とある此菊は、蘭の字の誤を寫傳へしなるべしと、上田秋成はいひつれど、さにはあらじ、日本後紀に、同じ御代の此事をか、れたるにも、插菊花とあり、二書ともに蘭の字を草の手にかきて、菊にあやまるべしやは、略 下